

日本昔話より
みやこ鏡
〈初演〉

殿様

「孝行者の太郎作とやら、その孝行やあつぱれなり、褒美をとらずぞ、金^{かね}か、田畑か、何でも望みを言うてみよ」

太郎作

「何にも要らねえでございます」

殿様

「本当に何もないのか」

太郎作

「望みがあるといやあ、たつたひとつ、死んだお父さまに一目会わせてもらいてえ。でもそれは無理なことござります」

殿様

「ふうん、ああこれ、都にて求めし家の宝のアレを持て。…太郎作よ、この箱の中を覗いてみよ」

太郎作

「こりゃ、お父さまか、ちよつと若返つたかなあ、泣かないでくれよ、おれも泣くよ、お父さまよ」

殿様

「その品、孝行なるそのほうにつかわす、ただし人には決して見せるでないぞ、よいな」

むかしむかし、山中に小さな村があつたとき

村一番の親孝行の太郎作が、褒美にもらつた大事の箱、言われたとおりに

誰にも見せずに納屋の奥、古いつづらにしまったが、

朝な夕なに寝る前に、

太郎作

「お父さま、おはようございます、今朝は冷えるが寒くはないですか」

太郎作

「お父さま、ただいま帰りました、麦もだいぶん膨らんで来ましたよ」

父さま父さま、顔を見ずにはいられない

女房

「あんた、どこへ行くのかい」

太郎作

「あ、うん、はばかりへ」

へ 風よ吹きやるな 吹いても言うな

願い叶うた 納屋の中^{うち}

女房

「おや、また、はばかりと嘘ついて納屋へ入って行つた」

へ エー、うちの亭主は正直者よ

それが慣れない風吹かす

たてもたまらず女房は、亭主の留守に納屋に^い入る。

隅から隅まで調べると、

つづらの中に見慣れぬ箱。覗いてみれば、こつちを見ている女の顔に、

女房びつくり、

女房

「やい、おまえはどこのだいつだ、返事しないか、図々しい、なんだよ、ぼさぼさ髪の毛、色黒の、へちやむくれがさ、なんだよ、泣いてやがる、泣きたいのはこっちの方だよ」

知らずに戻った太郎作を、逃さじ遣らじと詰め寄る女房

(女)

あんた、何かわたしに話はないかえ

(太)

なんにもないよ

(女)

隠し事は

(太)

なんにもない

(女)

あの女子はさ

(太)

どの女子だよ

(女)

つづらの中の

(太)

見たのか！

(女)

ほら、やっぱり女子を隠してた

(太)

ありゃ死んだ父つさまだよ

(女)

ええ悔しい、あんなぼさぼさ髪の毛、色黒の、へちやむくれは、どこの女子だ

(太)

父つさまだよ

(女)

わたしに隠して えい えい えい

とつくみあいの大喧嘩。

そこへ通った尼さんが、まあこれこれと仲割って、わしが見てきてやりましょと、

納屋の中にぞ、進めける。

辺りは人の気配なし。古いつづらのまたその中に、ありがたそうな箱ありて。左右見回し、おし開けば、

「やあ？」と尼は思案顔。うん？うん！うんうんうん…

尼さん

「中にいたのはな、女子じゃ、けどもな、すまながつて、髪切つて、尼になつていたわ」

とさあ、鏡を知らない村の中

今日はこれまで、おしまいおしまい。